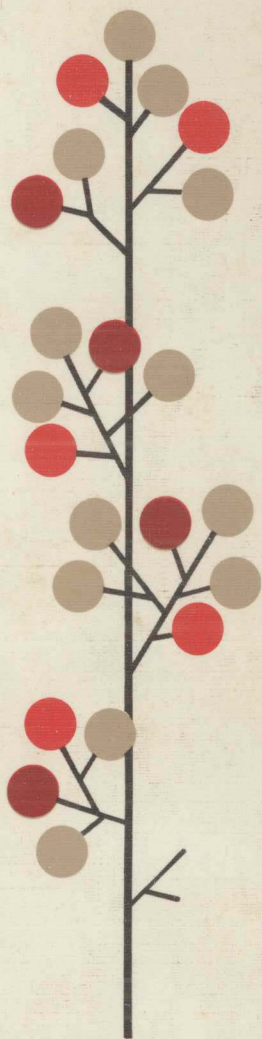


泣虫小僧

林芙美子

ジュニア版 日本の文学 17



泣虫小僧

ジュニア版

日本の文学

17

金の星社

林芙美子



泣虫小僧

ジュニア版・日本の文学 17

1980年12月／発行◎

著者／林 芙美子

発行所／株式会社 **金の星社**

〒111 東京都台東区小島1丁目4-3
電話／東京03-861-1861（代表）
振替／東京0-64678

印刷／（有）協栄印刷
製本／協和製本（株）

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

913 林 芙美子
泣虫小僧

金の星社 1980
268P 19cm （ジュニア版・日本の文学 17）

基本カード記載例

8393-040171-1406

人間の哀れあわな営々えいえいとした、
いとなみが私には
たまらなく好きなのだ。

目次

〔作品〕

風琴と魚の町……………七

清貧せいひんの書……………三七

泣虫なきむし小僧……………七

夢一夜ゆめいちや……………一四一

屋久島紀行……………一七五

青粥あおがゆの記……………一五

思い出……………二〇九

〔付録〕

作品にふれて（黒沢 浩）

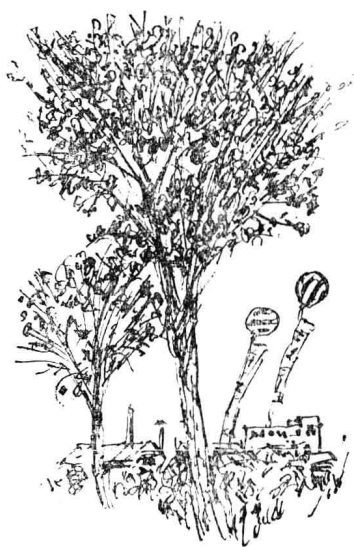
二七

作者にふれて（巖谷大四／林 緑敏）

二八

芙美子の年譜

二九



ジュニア版『日本の文学』の特色

- * このシリーズはジュニア版『世界の文学』の姉妹篇として企画され、近代日本の代表的作品を作家一冊にまとめました。
- * 原作は全文をおさめ、読みやすい現代表記にしました。
- * むずかしいことばやことがらは、各作品のおわりに「注」をつけ、図版などもいれて、わかりやすくまとめました。
- * またジュニアのみなさんがより作者に親しめるように、代表作のほか、作者のものの見方や考え方を伝える「詩歌」・「日記」・「紀行文」・「エッセイ」・「手紙」などもおさめました。
- * 巻末には、広い視野で作者と作品をながめられるように「作品にふれて」「作者にふれて」という読みものふうな解説と作者年譜をいれました。

泣虫小僧

林 芙美子

装本 有井 泰 挿絵 桜井 誠

風琴と魚の町
やうきん



1 父は風琴を鳴らすことが上手であった。

音楽にたいする私の記憶は、この父の風琴から始まる。

私達は長い間、汽車に揺られて退屈していた、母は、私がバナナを食^はんでいるそばで経文を誦^{じゆ}しながら、泣^{なだ}していた。「あなたに身を託^{たく}したばかりに、私はこのように苦勞しなければならぬ」と、あるいはそう話しかけていたのかも知れない。父は、白い風呂敷包みの中の風琴を、ときどき尻で押しながら、粉ばかりになった刻み煙草をすっていた。

私達は、このような一家をあげての遠い旅は一再ならずあった。

父はまぶたをとじて、母へ何か優しげに語っていた。「今に見いよ」とでも言っているのであらう。

えんえんとした汀を汽車は這^はっている。動かない海と、屹立した雲の景色は、十四歳の私の眼に壁の

ように照り輝いて写った。その春の海をかこんで、たくさん、日の丸の旗をかけた町があった。まぶたをとじていた父は、朱い日の丸の旗を見ると、せわしく立ちあがって汽車の窓から首を出した。

「この町は、祭でもあるらしい、降りてみんかやのう」

母も経文を合財袋にしまいながら、立ちあがった。「ほんとに、きれいな町じゃ、まだ陽が高いけに、降りて弁当の代でも移ぎまっせ」

で、私達三人は、おのおのの荷物を肩に背負って、日の丸の旗のヒラヒラした海辺の町へ降りた。

駅の前には、白く芽立った大きな柳の木があった。柳の木の向こうに、煤でよごれた旅館が二、三軒ならんでいた。町の上には大きい綿雲が飛んで、看板に魚の絵が多かった。

浜通りを歩いていると、ある一軒の魚の看板の出

た家から、ヒュッ、ヒュッ、と口笛が流れてきた。

父はその口笛を聞くと、背負った風琴を思い出したのであろうか、風呂敷包みから風琴を出して肩にかけた。父の風琴は、おそろしく古風で、大きくて、肩にかけられるべく、皮のベルトがついていた。

「まだ鳴らしなさるな」

母は、新しい町であったので、恥ずかしかったのであらう。ちよつと父の腕をつかんだ。

口笛の流れてくる家の前まで来ると、鱗まびれになつた若い男達が、ヒュッ、ヒュッ、と口笛に合せて魚の骨を叩いていた。

看板の魚は、青笹の葉を鰓にはさんだ鯛であつた。

私達は、しばらく、その男達が面白い身ぶりでかまぼこをこさえている手つきに見とれていた。

「あにさん！ 日の丸の旗が出ちよるが、何事ばし

あるとな」

骨を叩く手をとめて、眼玉の赤い男がものうげに振り向いて口をあけた。

「市長さんが来たんじゃ」

「ホウ！ たまげたさ、わぎだな」

私達はまた歩調をあわせて歩きだした。

浜には小さい船着場が沢山あつた。河のようにぬめぬめした海の向こうには、柔らかな島があつた。島の上には白い花を飛ばしたような木がたくさん見えた。その木の下を牛のようなものがのろのろ歩いていた。

2 ひどく爽やかな風景である。

私は、蓮根の穴の中に辛子をうんと詰めて揚げた天麩羅を一つ買った。そうして私は、母とその島を見ながら、一つの日麩羅を分けあつて食べた。

「はようも、どんなはいよ、売れな、売れんでもええとじゃけに……」

母はほのかな^{わび}佻しきを感じたのか、私の手を強く握りながら私を引っぱって、波止場の方へ歩いて行った。

肋骨のように、胸に黄色い筋^{すぢ}のついた憲兵^{＊6}の服を

着た父が、風琴を鳴らしながら「オイチニイ、オイチニイ」と坂になった町の方へ上って行った。母は

父の鳴らす風琴の音を聞くと、うつむいてシュンと鼻をかんだ。私はほんやり油のついた掌^{てのひら}をなめていた。

「どら、鼻をこっちい、やってみい」

母は袷^{あし}にかけていた手拭^{てふき}いを小指の先にまいて、私の鼻の穴につっこんだ。

「ほら、こぎゃん、黒うなっとるが」

母の、手拭いをまいた小指の先が、椎茸^{しひたけ}のように^{＊8}

黒くなった。

町の上には小学校があった。小麦くさい風が流れていた。

「こりゃ、まあ、景色のよかとこじゃ」

手拭いでハタハタと髭^{ひげ}の上のうすい埃^{はこり}を払いながら、眼を細めて、母は海を見た。

私は蓮根^{れんこん}の天麩羅^{てんぷら}を食うてしまつて、雁木^{がんぎ}の上の露店^みで、プチプチ章魚^{たこ}の足を揚^あげている、揚物屋^{あげものや}の婆^{ばあ}さんの手元を見ていた。

「いやしかのう、この子は……腹がばり、さけても知らんぞ」

「章魚^{たこ}の足が食いたかなア」

「何いいなはると！ お父さんやお母^かさんが、こぎゃん貧乏しよるとが判^{わか}らんな！」

遠いところで、父の風琴が風に吹かれている。

「汽車へ乗ったら、またよかもの食^くわしてやるけ

に……」

「いんにゃ、章魚が食いたか！」

「さっち、そぎゃん、困らせよっとか？」

母は房のついた縞の財布を出して、私の鼻の上でふって見せた。

「ほら、これでも得心のいかぬか！」

薄い母の掌に、緑の粉を吹いた大きい式銭銅貨が二、三枚こぼれた。

「白か銭は無かるうが？ 白かとないと、章魚の

足は買えんとぞ」

「あかか銭じゃ買えんとな？」

「この子は！ さっち、あげんこツウ、お父さんや、お母さんが食えんでも、めんめが腹ばい肥やしたかなア」

「食いたかもの、仕様がなかじやなっか！」

母はピシッと私のピンタを打った。学校帰りの子

供達が、渡し船を待っていた。私が殴られるのを見ると、子供達はドッと笑った。鼻血が咽へ流れてきた。私は青い海の照り返りを見ながら、しよっぱい涙をすすった。

「どこさか行ってしまうたい」

「どこさか行くいうても、お前がとのような意地っぱりは、人が相手にせんと……」

「相手にせんちゃよか！ 遠いとこさ、一人で行ってしまいたか」

「お前は、めんめ、さえよければ、ええとじゃけに、バナナも食うつろが、蓮根も食いよって、富限者の子供でも、そげんな食わんぞな！」

「富限者の子供は、いつもうまかもの食いよっとじやもの、あぎゃん腐ったバナナば、恩にきせよる……」

「この子は、嫁様にもなる年頃で、食うこツばかり言いよる」

「ぴんたば殴るけん、ほら、鼻血が出つろうが……」

母は合財袋がっさいぶくろの中からセルロイドの櫛くしを出して、私の髪かみをなでつけた。私の房々ふさふさした髪は櫛の歯があたりたびに、パラパラ音をたてて空へ舞い上がった。

「わんわんして、火がつきや燃えつきそうな頭じゃ」

櫛の歯をハーモニカのように口にこすって、唾つばをつけると、母は私の額ひたいの上の捲毛まきげをなでつけて言った。

「お父さんが商売があつてみい、何でも買こうてやるかの……」

3 私は背中むねの荷物を降ろしてもらった。

紫むらさきの風呂敷包みの中には、絵本や、水彩絵具

や、運針縫うんしぬいいがはいっていた。

「風琴ばかり鳴らしよるが、商あきないがあつたとじゃるか、行つて見い！」

私は棧橋さんざしを駆け上つて、坂になった町の方へ行つた。

町がせまいせいか、犬まで大きく見える。町の屋根の上には、天幕テントがゆれていて、桜のかんざしを差した娘達がゾロゾロ歩いていた。

「ええ——ご当地へ参まゐりましたのは初めてでござりますが、当商会はピンツケをもつて墓がまの膏藥こうやくかなんぞのようなまやかしいものはお売り致しませぬ。ええ——おそれおおくも、××宮様お買い上げの光栄を有しますところの、当商会の薬品は、そこにもある、ここにもあるという風ふうなものとは違ちがひまして……」

蟻ありのような人だかりの中に、父の声が非常に汗あせばんで聞こえた。

漁師いしやの女が胎毒たいどく下しを買った。桜のかんざしを差した娘が貝殻かいがらへはいった目薬を買った。荷揚げにあげの男が打ち身の膏藥こうやくを買った。ピカピカ手ずれのした黒

い靴かばんの中から、まるで手品ののように、色んな変わった薬を出して、父は、輪をつくった群集の眼の顔を近々と見せびらかして歩いた。

風琴は材木の上に転ころがっている。

子供達は、不思議な風琴の鍵かぎをいじくっていた。

ヴウ！ ヴウ！ このように、時々風琴は、突拍子とつぱしな音を立てて肩をゆする。すると、子供達は豆のようにはじけて笑った。私は占領された風琴の音を聞くと、たまらなくなつて、群集の足をかきわけた。「ええ——子宮しきゅう、血の道には、このオイ、チ、ニイの薬ほどきくものはござりませぬ」

私は材木の上に群れた子供達を押しのと、風琴を引きよせて肩にかけた。

「何しよっと！ わしがとじゃけに……」

子供達は、断髪だんぱつにしている私の男の子のような姿すがたを見ると、

「散剪さんざんり、散剪り、男おなごやアい！」とはやしたてた。

父は古ぼけた軍人帽子を、ちよいとなおして、振りかえつて私を見た。

「邪魔じゃましよっとじゃなか！ はようおッ母さんのところへ、いんじよれ！」

父の眼が悲しげであった。

子供達は、また蠅はえのように風琴のそばに群れて白い鍵けんを押した。私は材木の上を縄渡りつなわたのようにタッタと走ると、どこかの町で見た曲芸の娘のような手振りで腰をもんだ。

「帯おびがとけるとどう」

竹馬を肩にかついだ男の子が私を指さした。

「ほんま？」

私はほどけた帯を腹の上で結ぶと、裾すそを股またにはさんで、キュッと後ろにまわして見せた。

男の子は笑っていた。

白壁の並んだ肥料倉庫の広場には、針のように光った干魚が山のように盛り上げてあった。

その広場を囲んで、露店のうどん屋が鳥のように並んで、仲仕達が立ったまま、つるつるとうどんをすすっていた。

露店のガラス箱には、煎餅や、天麩羅がうまそうであつた。私はガラス箱にもたれて、煎餅と天麩羅をじつとのぞいた。ガラス箱の肌には霧がかかっていた。「どこの子なア、そこへもたれちゃいけないがのう！」乳房を出した女が、赤ん坊の鼻汁をすすりながら私をしかつた。

4 山の朱い寺の塔に灯がとぼつた。島の背中から鰯雲がわいて、私は唄をうたいながら、波止場の方へ歩いた。

棧橋には灯がついたのか、長い竿の先に籠をつけた物売りが、白い汽船の船腹をかこんで声高く叫んでいた。

母は待合所の方を見上げながら、棧橋の荷物の上にもたれていた。

「何ばしよつたと、お父さん見て来たとか？」

「うん、見て来た！ 山のごツ売れよつた」

「ほんまな？」

「ほんま！」

私の腰に、また紫の包みをくくりつけてくれながら、母の眼は嬉しげであつた。

「ぬくうなつた、風がぬるぬるしよる」

「小便がしたか」

「かまうこたなか、そこへせいよ」

棧橋の下にはたくさん藻や塵芥が浮いていた。その藻や塵芥の下をくぐって影のような魚がヒラヒラ